

人となった。昭和二十一年五月、八路軍に掴まり、ここではじめて終戦を知った』という。そして祖国日本に帰還できたのは同年九月だった。

私の歩んだ道程

北海道 菅野 要治

私は大正十（一九二一）年、東北の静かな村に生まれた。両親は健在だったが、これと言う定職もなく、その日暮らしの生活だった。父の仕事は天気の良い日は、山に行つて百合や芋を掘り、雨の日は河へ行つて魚を獲り、それを母が街に行つて売ってくる。物々交換するのか知らないが何とか全部捌いてくる。当時は田畑で農薬を使わないのでドジョウが沢山獲れた。

こんな生活なので獲れた日はいいが獲れない日もあり、その獲れ方によつてその日その日の生活が変わる。米の日もあれば芋の日もある。どちらかと言うと芋の日が多かった。それでも私共は何も言わない。子供は六人だが家にいるのは両親と私と妹の四人だけだった。私の上には長男、長女、次男の三人いるが、小学校卒業は一人もいない。

親は子供達に学校に行けなどと一度も言ったこともない。上の三人は家を出て仕事をしているのか私にはわからない。ただ長男は十四歳の時、家を出てサーカス団に行くことはうすうす知っている。私も三年までは学校に行ったが、四年の時に一年落第、それで学校をやめ、父の仕事をした。また他所の叔父さんに頼まれた仕事をしたり、私の隣に住んでいる者と山へ薪採りに行き、二人で競争した。それは高さ五尺横六尺で一束として売る。その一束を集めるのに一苦労だった。

山は個人所有の山だが枯れた木を採っても何も文句を言わない。こんな時父は風邪がもとで六十二歳で死んだ。いくら貧乏していても一家の柱が死ねば家の中は淋しいものだ。妹も他人の世話で紡績工場に勤めた。私は父の跡を継ぎ、母の面倒を見た。

父が死んで一年が経った頃、村の人が来て「私の叔父の世話をしてくれないか」と母に相談に来た。母もその人を知っていた。私にも母にも言え

ない考えがあったが、その時はそのことを母には言えなかった。

そんなある夜、母が「要治、お前満州に行きたいんだって。実は私に茶飲み友達として来てくれないかと相談があった。おまえが反対なら母さんは行かない」という。私はこの話が成功するよう祈った。私は叔父さんの家に行き、「そうして戴いたら有難い、叔父さん頼みます」と私は頭を下げた。これで俺も満州に行ける。私は急に大きな気持ちになった。今まで村から出た事もない者が急に世の中に出る。いや大海原を越えて大陸に進もうとしている。

こうして私は昭和十二（一九三七）年五月、茨城県内原を目指して村を出た。内原で一カ月の訓練後、内原を出発し敦賀港に着いた。海は見たことがあるがこんな大きな船に乗るのは初めてだ。今日は波が高く船は荒れるだろうとの事だった。

大きな島、あれは島じゃない朝鮮だ。私は海上

から清津の街を見る。船は汽笛を鳴らし静かに横付けになった。私達は長い列をつくって船を降りた。清津の市内を通り抜けて裏通りに出た。こんな立派な市内なのに駅がない。歩いて歩いても駅が見えない。やっと引込線に長い汽車が入っているのが見えた。七台だった。ああやっと着いた、私共はこれに乗った。話によればこの先は図們で税関のあるところだ。ああここから先は広い大地である。みんな疲れたのか眠っている。窓から外を見ている人もいた。

汽車は障害物がないのか速度を早めて進む。赤い夕日が窓から入り、一面の緑も赤く色どられ夕暮れを迎えた。大陸の夕暮れは長い。

汽車は夜も昼もなく北へ進む、夕暮れがおそく朝方は早い。遠くの方に緑の上を白い霧が流れて美しい。目覚めると大きな建物が見えた。どこだろうと窓辺から駅名を見る、「牡丹江だ」。ここは北滿の一番大きな都市で陸軍病院や軍の司令部もあつた。

汽車は入れ替えのため長い停車の後、汽笛を鳴らして再び走り出した。後の方を見ると、あんなに長かった列車は四両になっていた。

ああ私共は一カ所ではなく方々に次々と置いて行かれるのだなと思つた。牡丹江から二時間位走つて林口に着いた。林口から北と南に別れ、真つすぐに走ればソ連国境の虎林、虎頭方面、南はジャムス方面で、私共はジャムス方面に向かつた。ここで車両は二両になつた。

私達は滿州の一番奥か。後で知つたことだが、私がこの林口に再び来るとは当時は考えてもいなかった。途中小さな駅を幾つか過ぎて汽車は止まつた。「全員下車」との放送があつた。私共は降りて見て驚いた。ここには何も無い、貧しい滿人部落だつた。皆腰を下して休んでいると遠くの方から白い土煙を上げてトラックが何台か来た。

「さあみんなこのトラックに乗りなさい」「さあ出發だ」トラックは走り出したが土煙で前の車が見えない。こんな時は強い風がすぐ土煙を吹き飛

ばして前が見える。車は城壁に囲まれた満州人の街の表門から入り裏門に抜けて走った。人の乗った車は四台、後の二台は食糧のようだ。満人部落を出て三十分位走り車は止まった。「ここはこれから君達が入る所だ。どうだいこの広さ、この草原、君達の努力次第で、どう変わるか今の現場を忘れるでないぞ」と。前方に満州人の大工が建てたのだらう宿舎が四棟建っていた。

長旅のせいか夕食を早く食べ終えて、誰一人起きていない者もない。朝エンジンの音で起こされ、表を見るとトラックが四台、どこから来たのか、皆日本人だった。話によれば昨日の六時に出て今着いたとのことで、既にすぐ前の草原に丸いテント小屋が建ち、まるでモンゴル住民のようである。トラックは一般のより大きく、少し位の故障は自分達で修理できるそうだ。

私達はもう一棟と倉庫を建てる準備をした。大きな船のような箱に土、水、小さく切った草を入

れ、型抜きして「日干しレンガ」を作ると言う。それを積み上げる。簡単なようであるが二十人位で出来上がるまで一カ月近くかかった。

仕事は楽だが暑いので参る。四〇度近い日が毎日続いた。トラックはここから二里向こうから耕しているらしい。朝出て夕方になると帰って来る。やっぱり本職だ、もう二町歩位まで耕しいつでも豆が蒔けるそうだ、それで朝の内に豆を運ぶ準備をする。

内地から悲しい知らせが入った。長男のサーカスにいたのが芸の最中に転落死し、葬儀はサーカス団の方で盛大にやってくれたと、母からの知らせであった。

二十人位草取りに行った。草取りに行ったが草が一本も生えていない。草取りと言っても豆取りだ。いわゆる間引きで豆は機械で蒔いたので多く生えている。そこで三十センチに一本の割にするために外の豆は倒す。真中の畦に足を入れて左右

の列も取ってゆく。豆は生育すると腰の高さになる、それを考えての間引きである。

ある夜、集会所に皆集まり、世話人から次のような話があった。

「それで今から詳しく話す。君達がここへ来て一年半近くになる。皆の努力によつてここはこんなにも変わった。来た当時の事を思い出して見給え。あの土地がこんなに立派な土地になった。私もここを動かさたくない。しかし私共は上の人の指示により行動している。今度行く所はまだ君達に話さないつもりでいたが、君達も私も同じだ。だから今ここで話す。その方が君達も安心するだろう。

今度行く所は宝清で君達がここに来る途中通つて来た林口から東安に向かう、東安から二つ目の駅で降りて自動車の旅になる。出発は明々後日だ。明日は全員休んで忘れ物のないよう準備しよう」。

朝早くトラックが来た。各自自分の荷物を持って乗った。誰も何も言わない。後を振り返り見て

いた。自分達で造つた家も、勃利にもさよならである。満州人は振り向いて、子供たちは手を上げている。裏門から入って表門に抜けた。勃利の駅まで四時間近く走らないと着かない。勃利に着いた。長い道程だった。

着いたのがちようど昼だ。間もなく汽車が入る。一番後の二両は私達の乗る汽車だそうだった。汽車は走り出した。私の後にいる者がこんな話をしていった。「このまま林口で下りないで行く朝鮮に行く」のにと。汽車は林口を目指して走った。二度目なので皆外を見ないで食事をしていった。林口で私達の汽車は切り離され、前の車両は走り出し、別の汽車が私達の車両を繋いだ。

早朝に大きな街が見えて来た。東安だった。降りる人が多いが乗る人は少なかった。汽車は走り出した。あと駅三つ目で降りる。小さな駅だが駅の広場には戦車も来ていた。私達は待つていたトラックに乗った。トラックは走り出し、前方を見ると広い原野と広い道路だった。右側の広場に

は沢山の建物があり戦車が二、三十台並んでいた。やがて山が見えて来た。道路は段々せまくなり、山の片側を崩して造ったような道路がどこまでも続いていた。こんな山の中に私達の耕す土地があるのかなと思う。道路は軍用道路だった。最近造った道路のようでこの先に宝清があり、トラックで四時間位かかるそうだ。私共は途中から別れて別の道を進み、やがて前方に再び別れた道路が見えた。

トラックは少し登りに入った一面の広い原野に家らしいのが四、五棟並んで建っていた。トラックはその前で止まった。「全員下車」やと着いた。「君達よ右も左もよく見てくれ、まだ誰も手をつけていないこの原野がどう変わるか、君達はしっかり頭の中に入れて置いてくれ。ここは勃利よりいいかも知れない。小さいながらも山もあり、この広い原野にみんなできれいな花を咲かせよう。本当に皆よくここまで俺についてくれてありがとう。今日はゆっくり休んで、これからの事を考えよう。」といわれた。

皆新しい家に入った。やはりオンドルだった。宿舎は家、倉庫、物置を中心に外側の溝側にはバラ線が張られ、表門と裏門があり、表門から見ると右側が宿舎、左側が倉庫、物置で、中央は真っ直に裏門に抜ける。「それから、この住所は東安省宝清県頭道である」と教えてくれる。

表へ出るとその辺にはきれいな花が咲いていた。またここにトラクターが二台来ていた。運転手はいない、誰が運転をやるのだろうか。

「ちよつと聴いてくれ、今月から畜舎を造ろうと思う。種豚が二組入る。それと緬羊が十頭位入る予定だ。それとここは勃利と違って治安が悪い。そこで明日銃が来るそうだ。使い方は近くの兵隊が二人来て指導するそうなので、各組に五丁宛、来る事になる。そこでここに発表してある人は明日九時まで事務所に集まるようお願いする」と言われ、私共はまず豚小屋から造ることにした。

二つ造るよりも一棟建てて真中で仕切る方が早
いし造りやすいと意見が一致した。人が住む家と
違って造りやすい、二日もあればできるだろう。
内部はどうでも外側は嚴重に外から見えないよう
に、少しの穴でも塞ぐ。特に緬羊の方はしつかり
やらないと狼にやられる。

次の日トラックが来て、銃を持った兵隊が二人
降りた。皆集合した。

「これから実弾射撃をやる。一人や二人では駄
目だ。いつ使う時が来るか分からない。皆一度は
撃ってみる。一番大事なことは冗談にも人に銃を
向けるではない。射つ時は目標の後に何があるか
見て撃つ。反動があるので注意しよう」「最後に
ここに三十丁持って来た。手入れは必ずやる、毎
日やらなくてもよいが、銃は君達が持っていても
よい。弾は責任者が常に持っている。今日の説明
は終わります」とのこと。誰一人銃のことは言わ
なかった。なるだけ銃は使いたくない。俺達は軍

隊でないと思っていた。

畜舎ができた、あとはバラ線を二重三重に張り
廻す仕事をした。何かエンジンの音がする。誰が
動かしているのだろう。宿舎に帰って見るともう
二反位の畠ができていた。

新しい住所は東安省宝清県頭道訓練所内となっ
た。いい天気が続く、仕事も順調に進み、畠も大
分起きた。町の中でないので運転の資格のない者
でもやれそうである。いよいよ明日豚と緬羊が来
る。

畠も一町歩ほど耕し家畜も少ないながらも入り、
朝見ると多くの狼の足跡が残っている。匪清（匪
賊）もいつ来るかわからないとの情報が入ってく
る。私達の二里位の所を戦車も通っているので近
づけないのではないかと思う。

宝清に来てから七カ月位過ぎたある日「管野、
本部まで来るよう」当番が迎えに来た。「管野、緬
羊の方をやってくれ。そこで君に頼むが、明日宝
清から車が来る。それに乗って興凱駅に行き汽車

で林口に出張だ。林口に畜産牧場があり、二週間の講習を受けに行ってくれ」とのことであった。

次の朝、自動車に乗り頭道を出た。相変わらずすごい土煙に巻き込まれながら興凱まで行き虎林、図們行きの汽車に乗った。前年ここから左の線に乗って勃利に行ったことを思う。

誰かに牧場の方向を聞こうと思つて満州人に言葉をかけると、その満州人は日本語で返事をしてくれた。「ああその牧場はこの道を真つすぐに行き、橋を渡つて左に大きな看板が立っている。すぐわかる」と言う。橋を渡つてすぐ大きな案内の看板が見えた。事務所に行き話をすると「今日は皆出ているので休んで下さい。五時頃になれば皆帰つて来ます」と。私は一人で畜舎を見に行つた。女の人が何かしている。行つて見ると生まれたばかりの子供が親と遊んでいる。可愛いものだ。

次の日二人で畜舎に行く。指導員は「今日は十時頃まで付いていて私は帰ります。あとは一人で

一日居たいが急用があるのでできない。とにかく牧羊犬にまかせろ」という。指導員は十時前に帰った。あとは犬と共に放牧した。初めての仕事なので四方に目をくばり中々ゆるくない。

一日中こんな仕事をしていると時間の経つのが早い。もう帰る時間で「さあ帰ろう」私は犬に言った。犬は私が考えた人間より利口なもので、一言いっただけですぐ遠くの方に廻った。すぐ一カ所に綿羊を集めに行く。やっぱり犬も早く帰りたいのかな。少し行くと向こうから同志が帰つて来た。一カ所にならないように犬を前に出した。外の群れと一緒にしたら頭数がわからなくなる。

私は二日目の朝、今日も皆無事で帰つて来てくれる事を祈り畜舎を出た。今日も暑い、四〇度になるだろう。十時頃になると草は一勢に頭を下げ枯れたようになる。夕方になるとまた立ち直る。

ここへ来て早いもので一週間が過ぎた。こちらに来て牧場の設備や毛の刈り方、消毒の方法など毎日変わった事を教えられ、これから帰って私のや

らなければならぬ事が山ほどある。こうして今日は最後の放牧となり、一頭もやられないようにしなければと思いつながら畜舎を出た。

この牧場へ来る時は個人々々で来たので全部で何人来たのか分からなかったが、今日帰る人は四人だった。各地の状況や設備等を語り合い、林口駅で再会を誓いながらそれぞれの地区に帰った。私は興凱で下りて、誰か車がないかと方々捜して、宝清に行く騎兵詰所の車に乗せて貰った。四時間近く乗って別れ口で別れて、登り切った高台から我が宿舎と放牧場の方向を見た。

宿舎に入つて、向こうの設備や緬羊放牧の話などを報告した。向こうでは、一人で犬一頭に緬羊三百頭が一人分の仕事でと言うと「三百とはすごい、そこには緬羊が何頭いるのか」などと聴かれた。

今日は草取りと言うので、皆草取り鋏を持って畠へ出たが草がない。皆蒔いた豆ばかりだった。

今日はそして前に教えられた草取りのない豆取りの話をした。満州では一本に五合取れるそうだ。

「満州は秋が早く来る。秋になればすぐ冬だ。そろそろ冬の準備もしなければならぬ。豆も刈り取りまですぐだ。まずこの何も蒔いてない所を五十メートル四方にならせ、高い所はダメだ」「ここが豆を落とす場所だ。冬にやるから今の内に平らにするんだ。寒くなったらできないからな。脱穀は満州人がやる、君達はただ見てるだけだ。豆を山に積み上げる仕事は君達の仕事だぞ」と言われる。

早いもので満州にも冬が近づいて白いものが降つて来た。明日は豆を平らにした場所に一面に敷く。真中に満州人が座り、馬が外側を歩く。満州人はムチ一本で馬を操る。馬はゴロと木で造ったゴロで豆を落とす。満州人は煙草は吸うが馬は休まない。うまいものだ。皆だまって見ている。はじめの見学だ。豆を落としたら正月だ。豆は六十キロの袋に入れて積み上げる。

軍隊へ

外は寒いが内は温かい。オンドルは布団はいらない。冬は家から出るゴミは外には一つも出ない。満州に来て早くも四年が過ぎた。その間ノモンハン事件もあったがお陰様で銃を使う事もなかった。明けて昭和十七年一月十日、兵隊として関東軍の一員となった。現地入営との事で待っていた。戦車兵なので隣のあの部隊ではないかと思っていたら、入隊地変更で千葉の習志野戦車部隊入隊とのことだった。

現地入営と思ひ、のんびりしていた私もどうすることもできず、日数がない。一月遅れる電報を打ち、私が出たら送ってくれと友にたのんである荷物を安く友達や満州人に売り、汽車賃を作り、急いで千葉に行き入隊した。私は千葉に行くのも初めてだった。同じ戦車兵ならあの興凱にあったのにこんな所へこなくてもと、私は一人で自分の文句を言った。

千葉では一カ月で満州に派遣となり、満州はどこだろうと思っていると、なんと宝清の部隊だった。こんな事なら開拓地から入隊すればよいのにと思った。いつも開拓団員としてこの戦車部隊の前を通っていたのに、見ると入るとは段違い、朝から晩まですごい訓練であった。夜は夜でビンタの嵐、良くて悪くてもビンタの連続。特にノモンハン帰りと初年兵が恐ろしかった。万年一等兵が朝から晩まで睨みつける。特に二階は神様（古年兵）が両側におり、初年兵は下で朝から晩まで睨まれ通しである。

戦車兵は下士官が多い。一班に伍長が三人、兵長が一人、上等兵は十五人、一等兵一人、初年兵は片側に十人ずつ両方で二十人と言う計算である。初年兵は一人で下士官、古年兵一人ずつ面倒をみなければならぬ。酒保（売店）へは二カ月は行くことはできない、外出もなし。私は共同生活はなれているが、何も分からない者は可哀想なもので、ましてノモンハン帰り（本当に行つて来たの

かわからない)の万年一等兵は危険人物だった。

目の前で殴られるのを見て止める事もできない。血だらけになって、それでもまだ止めない。可哀想だが手を出せばやられる。神様や兵長、上等兵は見ているだけ、伍長も万年一等兵には齒が立たない(年功が古い)、伍長にも手を上げる事もある。

そんな中で初年兵は「よし、今に見てる、除隊までに必ず仇を取ってやる」と、私も思っているのですが、皆も思っているに違いない。受持ちの古年兵にも悪い人ばかりではない。私は兵長と上等兵を二人持っているが、兵長はいい人で、私共は売店に行けないことがわかってるので夜消灯で寝ていると、私の顔の所に静かに大福餅を入れてくれたことがあった。私は涙が出るほど嬉しく思い、毛布を頭まで被り、音のしないように食べた事を一生忘れません。この人は東京出身の鈴木と言う人でした。

戦車は普通四人乗りますが、天蓋からは車長だけ顔を出して外が見えるが、あとの三人は十円金

貨の厚さで、長さ十五センチ位の覗き穴から前を見るだけです。私は前方銃士で機関銃の方でした。戦車の中ではビンタはありません。狭いので叩く事はありません。その代わり足で蹴られる事がありません。

そんな事でやっと二年兵になり、外出にも行くことができるようになりました。私は友達一人を連れて元いた開拓団の訓練所に行きました。「なんだここに来てたのか」と友と語り合い、玉蜀黍を頂き、なつかしく思いました。

満州に来て早いもので一年五カ月になる。私も上等兵になり、本来なら古年兵が除隊する時なのに戦時中なので中の異動は変わりなかった。毎日、演習・演習で遠くの方まで行くこともあり、山や川の中を二十キロ位走ったこともある。私共は土煙を上げて走り、ただ乗っているだけだが、歩兵の人は御苦労さんに思う。

戦車部隊は戦車だけの部隊でもない。三個中隊

あれば一個中隊は自動車部隊だ。私の中隊も戦車と自動車を持っている。戦車兵に初年兵で入隊すると約一カ月は自動車専門に乗り、操縦や乗車、下車の練習ばかりやる。私の入隊地は習志野で広い。私は日本にもこんな広い所があるのかと驚いたものです。

毎日毎日演習に明け暮れている時、いよいよ私達にも異動命令があった。それも二つに分かれるのだ。部隊は千島に異動、その中で六十人は九州宮崎の部隊に転属、私は宮崎の方に行くことになった。ここで生と死に別れた。その時私は伍長になった。

私達は千島に行く戦友と握手して別れ、私共は汽車と船で宮崎に向かった。私達が宮崎に行つて誰言うともなく千島に渡つた部隊は敵の反撃を受け沈んだと聴いた。私達は紙一重の運により生き残つた。私達は宮崎に来て毎日空襲に会いながら演習をした。私達の部隊は度々非常呼集と言つて

夜中に起こされ、その時によって違うさまざまな事をやった。これはいざと言う時に慌てないように、完全武装や針に一尺の糸を通して表にできるようにとか、いろいろの事をやって、非常呼集には馴れていた。

その日の非常呼集は、昭和二十年八月十六日、終戦の翌日だった。その時、誰も日本が戦争に敗けた事も陛下の放送も聴いていなかった。非常呼集のあつた日は十六日、終戦後である。その非常呼集が私共の考えられないことだった。朝四時頃だった。その時はいつもと違い、「そのままでよい、すぐ前の松林の前に集合」との事、なんだ何もしなくていいのかと私は思った。

皆松林の前に並んだ。そこには長いテーブルがあり、左の方は銃、右の方は拳銃がずらり並べてあり、今思えば、その人は部隊長でないような気もする。

その将校は「これから呼ばれる者は前に、呼ば

れない者は帰ってよい」と言い、呼ばれた人だけ残り後は部屋に帰った。そこで将校の訓示である。

「君達は長い間父ともある中隊長、母ともある班長がいた。今日からは君達の判断で銃を使うかわらないか選択して行ってもらいたい。ただ今より転属書命を渡す。これを持って直ちに出発、二人以上は一緒にならない事」、私は銃と拳銃と弾を持ち袋に入れた。

私は千葉の人と二人で出た。途中で別れてそれぞれ家に帰った。私は仙台なので仙台で乗り替え石巻に来た。途中米軍が沢山いていつ捕まるかとそればかり心配していた。

私は銃と拳銃を持っているので気の休むこともなかった。家に来て戦争が負け、陛下が放送した事を知りがっかりした。そのうちに隣の若者が荷物を背負い帰って来た。私の母は「部隊によって違うかも知れないが隣の兵隊さんは荷物をいっぱい貰って帰って来たのにお前は鉄砲だけか」と言われ失望した。

千島に行った戦友が、冷たい海の底に眠っている。また満州の、あの義勇軍はどうなったのでしょうか。無事に故郷に帰れたのか。あの丘、あの谷に白骨になって雨や風にさらされているのではないかと思う。そんな事を考えると私はまだ生きている。今年八十三歳で細々と妻と二人で年金だけの生活を送っている。これだけでも良いではないかと言われるかも知れませんが、逃亡兵だけは取り消してほしい。

多くの戦友、義勇軍の友よ（二二、八〇〇人）、安らかに眠ってほしい。

【解説】

体験記執筆者は、大正十年、東北の寒村に生まれた。

父が死んで一年が経った頃、母が叔父の世話をする事で再婚し、この機会に執筆者は満州開拓団に入ることを決心する。大陸への憧れである。

こうして昭和十二年五月、茨城県内原での一カ月の訓練後、満州へ渡り、最初に入植したところは牡丹江からジャムス方面へ行った広大な草原であった。

開拓は、トラクターで大豆を栽培する。また倉庫を建てるため、「日干しレンガ」を作る。

夏は四〇度近い日が毎日続く。しかしまた入植地を宝清というところへ移動することとなる。そこは東安から三つ目の駅で降りて行くが、その街には戦車部隊が駐屯しているようであった。新しい入植地では畜産も行い、種豚と緬羊の飼育を始めることになったが、前の勃利と違って治安が悪い。開拓団として銃を持たされることとなり、近くの兵隊が指導に来て、各組に五丁、計三十丁の銃と弾丸が割り当てられる。しかしなるたけ銃は使いたくない。俺達は軍隊でないとと思う。

新しい住所は東安省宝清県頭道訓練所内となった。

満州に来て四年が過ぎ、昭和十七年一月十日、とうとう兵隊として関東軍の一員となる時がきた。現地入営で、戦車兵であるので隣の部隊ではないかと思っていたら、千葉の習志野戦車部隊入隊になった。

そして千葉には一カ月で満州に派遣となり、満州はどこだろうと思っていると、なんと宝清の部隊だった。いつも開拓団員としてこの戦車部隊の前を通ったのに、見ると入るとは段違い、朝から晩まですごい訓練であった。夜も昼もビントラの嵐、特にノモンハン帰りの万年一等兵が朝から晩まで睨みつける。

入隊して一年半、異動命令があった。二つに分かれ、部隊は千島に異動、残りの六十人は九州宮崎の部隊に転属、私は宮崎の方に行くことになった。ここが生と死の別れ目であった。千島に行った部隊は敵の攻撃により沈んだ。

そして終戦であるが、その日、非常召集があった。昭和二十年八月十六日、終戦の翌日だった。まだ誰も日本が戦争に敗けた事も陛下の放送も聴いていなかった。その非常召集が私共の考えられないことだった。朝四時頃、前の松林に集合させられた。そこに長いテーブルがあり、銃と拳銃が並べてあり、一人の将校が名前を呼ばれた人だけに「今日からは君達の判断で銃を使うか使わないか選択して行ってもらいたい」と言い、転属命令書を渡され家に帰った。

以上は、体験記筆者の思い出の要約記録であるが、東北の寒村に育ち、国策に沿って、かつ自分の雄飛を望んで大陸へ入植する。しかし、その満州入植は、満州防衛も兼ねた国策の流れの中のものであった。

戦争前の農村の環境、そして国策に沿って動かされた、当時の日本の縮図をみるような記録である。

私の軍隊生活（その三）

愛知県 河村 廣康

便り

故国を後に海山越えて遠い異国の満州へ。

毎日の激務に追われている者にとって、一番の楽しみと励ましになるのは内地からの便りだ。夜の点呼の後「書簡を伝達する」との週番下士官の声に、自分達初年兵は、それぞれの仕事をしながら期待に胸を膨らませて耳をすます。今に俺の名を、次はきつと俺の名を呼んでくれると……「以上、終わり！」の声はなんと無情に聞こえたことか。

それにひきかえ「河村二等兵！」と呼ばれたときは「ハイッ！」と自分でも驚くほどの声が出る。手紙を手にするとき、ハガキか封筒かも楽しみの一つ。また、家からか、友からか、それとも？と期待するのも大きな楽しみである。少しでも故郷